

Heidelberg: Spektrum Akademischer Verlag.
1999 S. 294-312.

次の論文の仏訳部分も、上記の加藤義信氏に負ったものである。

小嶋秀夫 子育ての伝統と教育の課題：日本と西洋 (La tradition dans les soins aux enfants et les enjeux de l'éducation: le Japon et l'occident).

日仏教育学会年報 第5号, 284-296. [仏訳付]

次の論文は、生物学、心理学、歴史学から社会学までを含む3部構成のシンポジウム(早稲田大学)の記録に含まれたものである。

小嶋秀夫 母親と父親についての文化的役割観の歴史
ヒューマン・サイエンス, 1999, 12(1), 20-25.

最後のは日独社会科学学会での発表内容である。

Kojima, H. Value of children in pre-industrial and industrial Japan. In German-Japanese Society for Social Sciences. Social and psychological change of Japan and Germany. 1999. Pp.195-207.

[その他]

小嶋秀夫 「育児」他9項目 臨床心理学辞典 八千代出版 1999.

[近刊予定]

この紀要の巻頭に、「私の家族関係研究と発達研究の前半20年の回顧物語」を書いた。それは昔話ではあるが、その後と今、そしてこれからの私につながっていると思う。ところで、名古屋大学教育学部に赴任以来、紀要のこのセクションで研究経過報告を続けてきたが、これが最後となった。そこで今回は、名古屋大学在任中に執筆し、西暦2000年のうちに現れる予定の論文等のうち主な5件を挙げておく。

1) 小嶋秀夫・速水敏彦・本城秀次(編著) 人間発達と心理学(仮題) 金子書房。

その中の巻頭論文「人間発達と発達研究が位置している状況」には、次の2)と3)の英文論文(とりわけ2)に基づいた部分が多く含まれている。2)は、英語圏で来年出版予定の『発達心理学ハンドブック』の中で、歴史的視点に立った発達心理学の問題を扱う唯一の章である。それを非西欧の研究者が1人で執筆するのは容易ではなかった。しかし、幸い2人の編者がハンドブック全体の中にうまく位置づく章として、若干の修正条件つきでOKしてくれた。3)は、オランダ人文学・社会科学高等研究所で開かれたシンポジウムを基にしたもので、発達心理学と歴史家からなる6名の滞在研究員グループの寄稿だけでなく、アメリカの心理学と歴史学を中心としたシンポジウムへの招待参加者が寄稿したものが多く含まれている。

2) Kojima, H. Historical contexts for development. In J. Valsiner & K. Connolly(Eds.), Handbook of developmental psychology. Sage.

3) Kojima, H. History of children and youth in Japan. In W. Koops & M. Zuckerman (Eds.), Beyond the century of the child: Crossroads of cultural history and developmental psychology (tentative title).

そして、1985年の内容を大幅に改訂したものが以下のものである。

4) 小嶋秀夫 日本の児童発達観 詫摩武俊(監修) パッケージ・人間と性格2 性格の発達 ブレーン社。

(1999年11月8日)

研究状況報告

岡田 猛

1999年2月末より、国際交流基金の援助を受けて、一年間の予定でアメリカのピッツバーグ大学学習開発研究センターにて、客員助教授として研究を行っています。大学改革等で忙しい時期に、じっくりと研究に専念できる機会を与えていただいたことに大変感謝しています。

1998年10月～1999年10月の研究状況報告。

(1) 研究業績

印刷中および発行済み(1998～1999)

編著

岡田猛・田村均・戸田山和久・三輪和久編(1999)「科学を考える：人工知能からカルチュラル・スタディーズまで14の視点」 京都、北大路書房

K. Crowley, C. D. Schunn, & T. Okada (Eds.) (in press). Designing for Science: Implica-

tion from everyday, classroom, and professional settings. Mahwah, NJ: Erlbaum.

論文および著書 (分担執筆)

岡田猛 (1999) 科学における共同研究のプロセス: インタビュー, 質問紙調査, および, 心理学的実験による検討 岡田猛・田村均・戸田山和久・三輪和久編 科学を考える: 人工知能からカルチュラル・スタディーズまで14の視点 京都, 北大路書房

岡田猛・野上康子 (1999) 科学的研究におけるコラボレーション: 認知心理学の知見から 教育システム情報学会誌, 15, 366-373.

Okada, T. & Shimokido, T. (in press). The role of hypothesis formation in a community of psychology. In K. Crowley, C. D. Schunn, & T. Okada (Eds.) Designing for Science: Implication from everyday, classroom, and professional settings. Mahwah, NJ: Erlbaum.

岡田猛・Crowley, K. (印刷中) 面白い研究のやり方: 発達心理学における二つのアプローチの研究者へのインタビューに基づいて 小嶋秀夫・速水敏彦・本城秀次 (編) 人間発達と心理学 東京: 金子書房

Schunn, C. D., Crowley, K., & Okada, T. (in press). Cognitive science: Interdisciplinarity

now and then. In S. J. Derry & M. A. Gernsbacher (Eds.), Problems and promises of interdisciplinary collaboration: Perspectives from cognitive science. Mahwah, NJ: Erlbaum.

書評

Holyoak, K. J. & Thagard, P. 鈴木宏昭・河原哲雄監訳 (1998). 「アナロジーの力: 認知科学の新しい探求」東京: 新曜社 認知科学, 6, 375-376.

(2) 学会活動

編集委員

認知科学学会誌「認知科学」

Psychologia Society “Psychologia: An international Journal of Psychology in the Orient”

その他

The 2nd International Conference on Cognitive Science プログラム委員 1999年

(3) 招待講演等

日本心理学会小講演「心理学研究における仮説の意味」1999年9月

研究経過報告

森田美弥子

一昨年10月に教育学部に赴任した。半年間は併任という形で医療技術短期大学部との掛け持ち状態があり、昨年からは本格的に教育学部での生活が始まった。知っているようで知らないことだらけの1年間が過ぎ、あっという間に3年目もう後半に入った。遅ればせながら、この3年間でまとめて報告したい。

1. 学生相談研究

学生相談室専任時代の仕事をまとめるべく、事例を通して青年期発達を考えること、来談への動機づけを中心として大学生の来談プロセスについて検討し自分なりのモデルを提示していくことを課題としている。

<分担執筆>

森田美弥子 1998 良い娘からの脱皮 鳴澤實: 編「こころの発達援助-学生相談の事例から」ほんの森

出版 Pp.30-34

森田美弥子 1999 青年期を生きるということ-学生相談と成長促進 池田豊應・後藤秀爾: 編著「心の臨床・その実践-かかわることの原点から」第6章 ナカニシヤ出版 Pp.83-98

<研究論文>

森田美弥子 1997 学生相談室イメージと来談の関係-大学生を対象にして 心理臨床学研究15 406-415

森田美弥子 1998 心理療法への来談動機-研究の展望と今後の課題 名古屋大学教育学部紀要 (心理学) 45 1-8

森田美弥子 1999 中断事例に学ぶ 名古屋大学教育学部心理教育相談室紀要14 1-3